

# 三河アララギ

平成二十八年

四月号

第六十三卷 第四号



ニューヨーク日記(114) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Tatami-iwashi, Sake Food

## Blue Shoe Diaries



日本に行ってきたばかりだけど酒飲みはやっぱり日本酒好きなのよね! 畳鰯はおつまみにぴったり! 子供の頃からよく食べたな~そんな日本の食べ物がいくら日本食屋さんでも外国に有るようになると嬉しいし頼まずにはいられない。今晚のお酒はうまいなあ~

It hasn't been that long since I came back from Japan but for someone that likes a drink in the evening, it's always nice to come to Sakagura for a nice cold sake. And finding tatami-iwashi on the menu just makes it that much more enticing. It's a perfect match to a dry cold (or hot!) sake. I used to eat these wonderful sheets of baby sardines since I was a kid, and I'm happy to see them on a menu outside of Japan. Feels random but more and more people have gotten so knowledgeable about food world wide. Especially in NYC. Makes me happy!

# 目次

## 第六十三卷第四号(通卷七四八号)

表紙・蘭

今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(14)

Blue Shoe(2)

ノボタンの窓

御津 磯夫(4)

歌集「はゝきくさ」

大須賀寿恵(5)

歌集「草々」

今泉 米子(6)

雪の朝

岡本八千代(7)

蒲の穂

今泉 由利(8)

鬼まつり

弓谷 久子(9)

春の息吹

青木 玉枝(10)

本宮山

内藤 志げ(11)

山は暮れゆく

林 伊佐子(12)

綿入れ半天

安藤 和代(13)

野趣

鈴木 孝雄(14)

赤白混じり

清澤 範子(15)

世界より

足立 晴代(16)

重力波

阿部 淑子(17)

生きる

伊藤 忠男(18)

如月のこと

近藤 映子(19)

佐脇浜

白井 信昭(20)

目白の子

森岡 陽子(21)

クアラルンプール

杉浦恵美子(22)

セシダン草の実

山口千恵子(23)

無

夏目 勝弘(24)

歌集「夢のつづき」

水上 信子(25)

『ことよせ』

いーはとぶ(26)

鈴木美耶子(26)

吉見 幸子(26)

牧原 正枝(26)

岩瀬 信子(26)

石田 文子(26)

森 厚子(27)

山崎 俊子(27)

三田美奈子(27)

水野 絹子(27)

牧原 規恵(27)

稲吉 友江(27)

東洋大学(28)

小学生の部(30)

山元 正規(32)

山迫 京子(32)

森岡 陽子(32)

田中 清秀(33)

重野 善恵(33)

小柳千美子(33)

今泉 由利(34)

米田 文彦(34)

柳田 皓一(34)

植村 公女(35)

かさね吟行会

夏目 漱石(35)

『酔いの徒然』(48)

田中 清秀(36)

本からのあれこれ(5)

丸山酔宵子(38)

ある自然科学者の手記(47)

米田 文彦(40)

絹の話(65)

大橋 望彦(42)

短歌に詠まれた茂吉

今泉 雅勝(44)

五十五回

楽しい時間(41)

鮫島 満(46)

「楽しくマナー」⑩

山本紀久雄(48)

「歴代天皇御製歌」(五十四)

辻 照子(50)

童謡「光るお蚕さん」

貫名海屋資料館(52)

高橋 育郎・高橋 知子(54)

「氷魚のことから」(183)

岡本八千代(55)

長塚節の草鞋

夏目 勝弘(56)

ことのはスケッチ(448)

今泉 由利(57)

編集室だより(二〇一六年 二月)

三河アララギ(58)

和菓子街道(14)

平松 温子(59)

お知らせ・「三河アララギ」について

(60)

ノボタンの窓（昭和二十九年〜昭和四十年） 御津磯夫

アカンサスは百日あまりを咲きのほり終りの花の高くなりたり

乱れたる机の上を掻きわけていまなき君の葉書をさがす

かぎろへる夏のかすみの野をこえて大和正田の君にちかづく

十年病まぬ呪の小餅おしいただく八十七歳のわが父も医師

硝子戸に映りつつ鳴く朝鳥を迦陵頻伽とわれもおもはむ

カンフルをといひし一言自然死の医師わが父の最後の言葉

わが父の骨となるまを日の当たる小松の山に向きて歩める

こもり沼に波たえまなききさらぎの風に乱るる父のけむりは

八十八年またけく生きていまは亡き父よりの細胞はわれに生きつぐ

咲き終りしこの一鉢に立つ木札「陀兜囉」と白く君が手に書く

歌集「はゞきくさ」II

大須賀寿恵

見積書また請求書六枚を整へて五〇〇円の県費おり来ぬ

献立カード二百六十例が完成し今日研修会に手渡すばかり

閉会の時刻々に迫りつつ研修会の発表要項のズレ直しゐる

人事異動の極秘文書の下書を焼却炉にてわれは焼く捨つ

血色素量が半ばに足らぬとスモン病の吾は献血断られたり

スモン病やみつつ彼岸過ぎとなり店に足温器をわがさがすなり

秘密会議夜々に続きて今宵また足いたみつつお茶汲みをする

異動の中のひとりの君を憶ひつつ一覽名簿の原紙切りゆく

施錠して人事異動の名簿刷る吾が輪転機の音高くして

顔と手にむくみ来りし今日もなを傷害事故の集計をする

歌集 「草々」

今泉米子

上弦の月淡き方をさしてゆく五位の列仰ぐ今日のよろこび

つくりたる野菜のスープと井戸の水を入れたる瓶をさげつつ通ふ

たたみたるままの新聞紙たまりゆく夫の病まふにうろうろとして

たてのもの横にもせざるものぐさの夫めぐるのみに保たれし庭

試歩の夫ささへ見てをり工事場のクレーン車の構造すこしわかる

わが夫の歩みはじめて裏庭の山櫻今朝咲きそめし云ふ

視力なき子を歩まする庭のみち二人静の花には寄らず

昨夜よりリズム変らず梅雨ふりて思ひはなれず遠く病む子に

菓子箱に動かぬクワガタ虫を飼へり明日は放たむ約束といふ

貰いたる茄子なすびを煮むと決めたれば相撲見てゐるしばらくのあひだ

## 雪の朝

蒲郡 岡本八千代

天空より次から次と舞ひてくる雪の軽さよ朝にふる雪

二月にんがつの雪ふり積もりけさの庭ふかふかま白に驚きてをり

庭の雪ま白にま白歩きゆく径さへわからずしばし佇ずむ

猫とわれの別れはつひに雪の朝か足跡さへも一つも無しに

雪の玉固くまるめてめざしくるは新任女教師わればかりにて

東ひんがしより淡き太陽さしてきぬ雪はたちまちしろがねいろに

司馬遼の菜の花忌さへすでにすぎて裏の畑きいの黄の菜の花

漱石が逝きて百年の今年にて「坊ちゃん」をまたも読み出さむとす

漱石の初版本また復刻版の全巻が揃ひて並ぶ書棚に愉し

「本の中にうづくま蹲りたい」などと書いて母に手紙を出したること思ふ

## 蒲の穂

東京 今泉 由利

捌く<sup>さば</sup>とふ大事をしてをりしみじみと海鼠の命私に移る

東寺なる五重の塔の天辺の九条の葱の葱坊主みゆ

元なぎさ海見ることの無きままに高々延びたつビル郡の街

蒲の穂のひととせサイクル見詰めこし今日は逢けて飛びゆくところ

蒲の穂の逢け綿毛は種をつけどことどこへ運びかゆかむ

蒲の穂の雄花花粉の薬効よ因幡の兎はるかなりけり

無患子<sup>むくろじ</sup>とまず名前のうれしかり子供が病気をしなるといふを

お釈迦様のいはれるとほり無患子の黒実連ねて数珠を作らむ

ムクロジ科レイン・ランブータン・リューガン・わが好物に思ひを馳する

真白し絹のスカーフ洗はむよ無患子サポニン泡だててゐる



## 鬼まつり

豊川 弓谷 久子

豆まきの声も無けれど何となく心明るむ明日は立春

旧正月は小学校の学芸会主役演じき只一度だけ

好天に恵まれましたと鬼まつりのたんきり飴が今年も届く

春一番の風に怯えてこもりをりこもりゐる日の多くなりしよ

さきがけてまず咲く花とマンサクの咲き初むニュースが流れをり

寄り添ひてマンサクの花仰ぎたり論読会の寺の境内

スエ先生も静誠様も今は亡し思ひ出のみのマンサクの花

異常無し診断受けたり咲き初めし梅の花の香暫し楽しむ

坂道を下りて上りて息をつぐ葉陰に赤し藪椿の花

子の上がる脚立を我が押さえをり西日遮る日除を吊らむ

## 春の息吹

新城 青木玉枝

枯原も日に日に青芽見ゆ朝足裏に春の息吹きを

老いし今昔の夢も消えてゆくつくづく思ふ若さがほしい

山里に二年を迎へ日び暮れて都会のリズム忘れゆくなり

何事も人にまかせて過ぎてきたわが半生期今更悔やむ

独り部屋誰に遠慮も気がねなく読書編物出来る嬉しさ

持ってきたラジオでニュース深夜番組わたし一人の楽しむ時間

莊かこむ土手の枯原青芽幾つ冬の名残りの終りを告げて

人生も残り世生きて若き日の夢まくらの夜々一人寝の涙

歳古れば楽しみ一つ一つ消え足腰弱る日びの明け暮れ

今何が一番ほしいかときかれたら若さがほしい財を出しても

## 本宮山

豊川 内藤 志げ

四時に起き本宮山に初日の出息子と曾孫土産話を

本宮山より日の出<sup>おうが</sup>拝み小三の響は一生の宝となさむ

裏庭に置きたる事も忘れぬしシンピジュームに黄の蕾が

三千歩を日々の仕事とひとり決め落葉音たて今日も始まる

朝よりの雨の予報に窓の外末だよろしと傘を持ち出づ

日射よく風静かなり小ばけつに山と盛りたり花畑の草

白梅に枝移りする目白見ゆ花卉一ひら落ちゆくところ

竹の穂の大きく靡く今日の風葱の荷作り夫は作業場

わが門のヘンスに止まるジョウビタキ胸の赤きが美しきかな

鶉は庭の主と小鳥<sup>あるじ</sup>らを追ひ追ひはらう紋付も追う

## 山は暮れゆく

岡崎 林伊佐子

冬の木は風に打たれて打たれ立つひそやかにして山は暮れゆく  
雪残る木陰の道に羚羊の食べ物さがす足跡がつく

ふる里の世相の変移を残さむと書きこみ歌集にまとめてをりぬ

「寒狭川」を出版してより詠みし歌拙つたなき歌も生きゆく証

若き日の突発難聴のりこえてくちもとよみて農仕事たのしむ

冬耕にわが背後につき寄りてくる紋鶉の一羽と親しくなりぬ

庭石に餌まきて飼ふ雀たち電線に並び吾を待ちをり

杉山の木陰に張れる霜柱三センチほどが踏めど崩れぬ

糖尿病に失明したる古里の友もあわれな一生ひとよとなりぬ

農耕に働きすぎて村人に聞きて悲惨しんつうな心痛しのぶ

## 綿入れ半天

豊川 安藤 和代

どんな時も強く生きよと言った父母偲べば冬の月も厳しく

冬の畑綿入れ半天ほうかむり麦踏む父の面影のたつ

卒論も教員試験も終えし孫居間に長なが半日をねる

ベーコンにキャベツ炒めて玉子とじ厨は春色につつまれてをり

来春は金婚式と心浮き夫とのお茶の安らぎ深む

一輪の梅咲く庭に目白二羽声賑やかに立春も過ぐ

梅咲けば三つつで逝きし妹の「梅代」と言うを深く偲びぬ

孫の夜具干せば春の香孫の香の胸いっばいの幸に包まる

飛行雲のほんわりくずるるその横を一点光りて飛行機のゆく

車いすの夫と散歩の野は青み茎の短かき蒲公英の咲く

## 野趣

沼津 鈴木孝雄

焼き牡蠣の味の深さを体験すプリプリの身に野趣の香り

光のみただ照り返す駿河湾人々家を出で春を迎えぬ

重力波ついに検出と発表ありアインシュタインはどんな顔する

老婆二人道を隔てておしゃべりす直ぐに名付けたおばあちゃん通り

老いた母大声出しても笑うばかり意思の疎通は手書きメモ頼り

立春の声を聞いて目を覚ましようちの水菜が急に芽伸ばす

白い花やがて艶やか桃色にカワラナデシコ大和女人だ

ジユガイモの予定の畝を耕せりモザイク病を天日殺菌

図書館の前まで行って気づく休館学んだはずの事前の調べ

カメラ屋がシャッター下して廃業に地方の衰退じわりじわりと

## 赤白混じり

春日井 清澤 範子

副作用強くなりたる今日の日の最善尽すを神に祈りて

貝塚伊吹と並びて南天実をつける赤と緑と庭のにぎわひ  
体操の曲口ずさみつつ手足伸ばす運動するも吾の日課と

雨戸を開け吾を呼ぶ夫は庭にある赤白椿ほら咲いたよと

庭にある赤白混じりの椿花今日見れば形そのままに落つ

我が夫は凶太くなれと吾に言ふ主婦業頑張る最善尽す

米こうじほぐして甘酒を作るなりご飯の量と温度の調節

寒波来て厨の窓の明るかり雪の中にも鳥の声あり

立春を十日過ぎたるばかりにて五月上旬の陽気は異常

休日の朝は学童の声は無し少し淋しく門戸を開けぬ

世界より 東京 足立 晴代

春風に押されて歩む道すがら緑の樹々さわやかに

碧き空花も香りて陽燦々と恵み豊かに平和なる日々

穏やかに春の海あり平和なる過ぎ去り行きて恐れる波濤なみは

外国とつくにの思惑おもわく夫々さまざまに掛け引きありて恐ろしや

世界より集まりし蘭一堂に驚くばかり数多あまたの珍種

吾歳われとしを忘れて出しし底力そこちから見事両手を捻挫させたり

日々通う治療のために乗る車娘に感謝頭上らず

どうしても三月六日に踊らねば(日舞)念ずる心神に届くや

手を病やみて日常茶飯事何気なく動かし至りと今更に思う

久しぶり筆持ち書きていつもより力入れずかささらとかけり



## 重力波

横浜 足立 淑子

年増せば他人<sup>ひと</sup>の親切身にしてみても感謝の心湧かぬ日ぞ無し

最新の体組成計に乗り見れば体内年齢若くして微笑む

血圧の高き人へのCDを繰り返し聴き効果を頼みぬ

「重力波」の初観測に成功し宇宙への窓新らたに開かる

小沢さん地元のおペラの指揮実りグラミー賞は普遍の輝き

## 生きる

大阪 伊藤 忠 男

刻々と変わる変化に戸惑いぬ母の容態気がかりなこと

食事すら喉を通さぬ体力の低下さらにか憎む病を

融和ケア言葉は優し響きなれ治す術無き悲し響きが

母の顔母の息にもまだ何か求める力残るが望み

目を閉じて奮い立たせるもの見えし気力に生を託すこのごろ

人は逝くいずれ逝くとてその時の見えぬからこそ生きられるのに

死に方は生き方写す鏡とて今ある我に何があるのか

歯が痛む足は痛むは胸痛むこれぞ誠に泣きつ面に蜂

ふるさとの友と歩けばふきのとう春を告げゐる青空の下

クラス会同じ話に同じ顔見間違えしは初恋の人

## 如月のこと

名古屋 近藤映子

見降しの川面に鴨の群れ泳く波に逆らい並びて行きぬ

如月のこの冷え込みの朝の窓ガラスにうつすら霜の光よ

如月五日鹿児島島の櫻島噴火のニュースに見入りたり

立春を迎え過ぎたれど寒気は尚も強く我身にしみ入る

リビングのサンセベリアは伸び伸びて私の背丈と変らぬ姿よ

如月は早やも夫の三回忌息子親子共に墓参の予定

時過ぎる速さを思う間もなく夫三回忌を迎へる如月

寒けれど晴天成りし夫三回忌子等と西明寺に参り

しとしとと路面をぬらす春雨は私の足元危なき要因

如月の末となりても殊の外寒気きびしく我身の痛み

## 佐脇浜

豊川 白井 信昭

寒々と朝戸を開け出で見れば花壇は斑にみ雪降りたり

佐脇浜ミニ日本列島来て見れば再びを咲く雪柳路

ああこれや旧東海道二川宿商家「駒屋」の復元されて

間口より奥に細長駒屋にて江戸の時代の面影をいま

主屋また離れ座敷の部屋の内ところ狭しと並ぶ雛人形

置きであるこれ「瓢箪から駒が出る」例たど通りの鬼瓦あり

傾斜なだりには脚立を立てぬ銚もて遂に太枝切り落としたり

明るかり春の日差しに枝打の済みし榎の枝のさやかに

待望の妻との遠出は開通の新城 IC「もつくる新城」

うららかな冬日差し入る店のなか賑わひながらランチバイキング

## 目白の子

東京 森岡陽子

陸奥の五体残った雛人形津波の跡か薄茶色のお顔

福は内昔は聞こゆ夕暮はあちらもこちらも戸は開かれず

コンビニに並ぶ幟は恵方巻き何を願ふや南南東に

イタリアの町の名が付くレストランテラスの風は七里ヶ浜から

江の電の線路脇から石段をぐるりと回る富士山大きい

マルゲリータ鎌倉野菜の並ぶ皿鳶が狙うテラスのランチ

まんさくの花びら風にゆるゆると追羽根遊ぶ羽の如く

紅梅の香り穏やか東慶寺縁切り寺と昔は悲し

満開の河津桜に目白の子。ピイ。ピイ。ピイ。ピイ。ピヨ。ピヨ。ピヨ。ピヨ。

梅の香と春の日差しを背に受けて釜飯食べに浅草に向かう

クアラランプールへ 蒲郡 杉浦恵美子

西尾から弥富行きとはこれ如何に終点にまで乗る人ありや

立枯れの竹叢が鳴る節々の空洞響かせ東風に揺れつつ

立枯れの竹叢東風に撓ひつつカラカラカラカラ鳴り続けている

裏藪の竹叢騒ぎて春を識る春が来たとして夫は居ないが

春節のクアランプールフェイちゃんに会うため赤子の顔見るために

雷鳴とスコール轟けどテーブルの賑ひ止まぬ此処は熱帯

フェイちゃんの家族と我とが円卓に春節祝ひ集へる縁

みんなして箸持ち料理をかきまぜて幸運祈るこの地の慣し

こんなにして春節祝ひて集ふれば今年は好いことあるかもしれぬ

中国名ミンユエといふこの赤ちゃん最初に話すは何語なんだろう

## セندان草の実

豊川 山口千恵子

星またたく大空高く飛行機は西空を行くただ仰ぎゐる

一つづつ付きたる草の実取り除くズボンの裾のセندان草の実

草避けて野の道歩き来たるはず数多付きゐるセندان草の実

右足と左足とはサイズ異なるとメジャーに計り店員はいふ

足に合ふ靴は歩いて心地よし駅の階段とんとんのぼる

玄関に入れて培ふ冬の日々ゼニノナルキに淡紫の花

賑はへる年に一度の国府の市に厄除け餅の包みを一つ

ときになればいつもの所に芽生えくる貝母の一群黒々として

玄関に吹き寄せらるる枯れ葉掃く照りゐる光は春を思はず

もろもろのこと思ひつつ飾る雛人形わが娘と共にはや五十年

無

豊川 夏 目 勝 弘

無は有なり有は無なりと今の我にきれれる物のいと少なかり

預貯金のゼロの我には唯一なる年金トハにつづく願ふ

澄みわたる今日の青空に雲のなし明日は雨との予報いでをり

いと狭き庭に草の緑なし春には憎くき雑草が繁る

檜の木の緑を凌ぎ冬木なす木木にも若葉のときの来るなり

我が庭の立木はネムの一本のみ淡き紅くれないの花咲くを待つ

目覚めたる闇に見ゆるもの何もなし道行く車のライトがよぎる

目覚めある闇にめぐらす思ひなしタンスの裏よりネズミの歯の音

有り無しにとらわれきたりし一世なりさてさてこれからはいかに生きなん



歌集「夢のつづき」

水上 信子

画然と空と海との青分けて水平線の光るさま見ゆ

いにしえを偲ぶ旅路や白萩の伽藍の軒に乱れ咲くなり

葉を落とし身軽になりて空を突く櫂の梢ビュツフェの絵なり

もみじ葉の小紋の柄に散り敷きて日々の過ぎ行く速さ身にしむ

近況を訊きつ答えつひとしきり会話途絶えて猫の歳きく

酒飲みて語りて古きともがらと夜は豊かに時を刻めり

高句麗と百済新羅を古地名のマップで結び史跡を訪ぬ

うつすらと紅をさしたる口許に仏の慈愛千年と経ぬ

石塔の黙して立てる仏国寺五体投地の僧いくたりか

地に伏して祈る僧あり静かなる広き寺内に木魚訝す

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

見下ろせば冬の相模の海光る茨木のり子の「根府川の海」の  
忘れゆきし孫の靴下たたむ時わが掌てのひらに入つてしまふよ

鈴木美耶子

新年の朝の食卓屠蘇交すわが家のしきたり六人揃ひて

沖繩のうらじろ朝顔に出合ひたりまずは一花手に取りてみる

吉見幸子

ふた抱へほどなる桜切り倒す青空高く嗚呼がらんどう

山桜花芽に葉芽の固きまま芽吹きをさめと一枝生けたり

牧原正枝

病室より夫とながむる一面の真赤な夕焼けに病うすれゆく

豆腐入りの白菜鍋のかすかな湯気夫とひさしぶりのゆうげのひととき

岩瀬信子

初詣ポリスの指示にて本殿に賽銭にぎりて豊川稻荷様

孫娘陣痛始まりあわただし家に残れる吾はただ寡黙

石田文子

今朝の雪辺り一面真白なりそして太陽にぎらぎら光る

日曜の朝に新聞の日曜版ゆつくり読むは何か月ぶりかな

賀状にはまた夏にはと書かれをり過ぎし日思ひ佇みて読む  
目を閉ぢて風音を聞く大寒の日だまりのなか我ひとりみて

鐘楼の鐘ゆつくりと六つ鳴る初観音のけふの縁日

小春日の畑に出でて草を引く四温のめぐみ背にうけつつ

人伝てにあの子も病むと知る年は除夜の鐘さへ空しく響く  
ただ無事に過ぎむことのみ氏神に祈る正月母も米寿に

わが庭の臘梅の花知らぬ間に匂ひにさそはれ咲きたるを知る  
しんしんと冷えくる朝のまどろみに窓の外には銀色世界

焼却場の煙は今朝も穏やかに中空に流るるただただ白く  
手袋を両手にはめてゴミ袋の大袋二つ運ぶ朝かな

森 厚子

山崎 俊子

三田美奈子

水野 絹子

牧原 規恵

稲吉 友江

# 現代学生百人一首

東洋大学

初めての父と二人の外食は互の頬を紅潮させる

柳井学園高等学校一年(山口県)

弘中千遥ちひろ

偽りで隠してしまったこのドアをそっと開いた友の優しさ

香川県立三本松高等学校三年

頼富光平よしみ

人の目をいつも気にして過ごしてたそんな自分にさよならしたい

高知県立伊野商業高等学校三年 中平葉月

久々に帰省した友慣れんばいその方言に寂しくなった

福岡県立八女高等学校二年 山口優夏

長崎に生まれあわせて理解する平和の大事さ八月九日

佐世保市立清水中学校一年 下田瑛人えいひと

緊張が制服を着て歩き出す吹奏楽部の曲と一緒に

佐世保市立清水中学校一年 杉山日菜ひな

通じない言葉の壁を乗り越えたダンスの文化は国をも越える

慶応義塾ニューヨーク学院二年(アメリカ) 小島一輝

美術の日何気なく描く絵はすべて生れ育った故郷の景色

慶応義塾ニューヨーク学院(アメリカ) 田澤宏樹

今年から相棒となった自転車の錆びた音には兄の面影

北海道札幌厚別高等学校一年 吉野萌もえ美み

「おかえり」とシチューの匂い母の声ふと考える巣立つその日を

北海道登別明日中等教育学校三年 安田萌も恵え

現代学生百人一首

東洋大学

【小学生の部】

クワガタが夏の夕ぐれまよいこみ虫かごさがす父とそふなり

加美町立宮崎小学校四年(宮城県)

渡邊夏希

秋の日に空見上げれば広い空まつ赤にそまり赤とんぼとぶ

コロンビアインターナショナルスクール六年(埼玉県)

小林莉乃

ぼくのうそいくつついたか思いだすふとんの中でもうつくまいと

さいたま市立南浦和小学校六年(埼玉県)

山浦健太

あと一步すぐそこにある優勝がおれの一打で今決めるんだ

山武市陸岡小学校六年(千葉県)

鈴木泰駒

沖繩で海にもぐって魚とりあの海へびはおそろしかった

リトルエンジェルスイントーナショナルスクール六年(東京都)

石塚

将しょう

夕焼けの空見上げれば赤とんぼ町まで来たの秋を知らせに

境市立新浅香山小学校四年(大阪府)

木村歩ふ有う花か

きれいだな空にかがやくアルタイルデネブとベガと三角えがく

境市立新浅香山小学校四年(大阪府)

福井美佳子

汗流し力出し切りがんばった組体終り涙が出そう

奈良市立済美小学校六年(奈良県)

上こう月づき愛まな郁か

遠足で歩いた道は田の周り中で稲穂が輝いていた

奈良市立済美小学校六年(奈良県)

野村美結ゆ

お母さんでんわなったらおこっけてもびっくりぎょうてんなぜこえかわる

大村市立放虎原小学校五年(長崎県)

馬場菜七な葉は

『俳句』

ものの芽の息するやうにほぐれけり

山元正規

まんさくは風にふるへて咲きにけり

ほどほどと言ふことのなく冴え返る

まんさくや散りそうにして咲きにけり

山迫京子

軒に干すジーパン踊る春一番

万歩計もひと休みする梅見茶屋

寺の鐘鳴りて降りだす春の雨

森岡陽子

腐葉土を崩し啄む親雀

五重塔見えて満作東慶寺



一陣の風にさ渡る杉の花

田中清秀

手を合はす古刹の庭や薄紅梅

白梅の枝に隠るる大手門

唾り雪鈍き音して旅の宿

重野善恵

廃屋や乙女椿の慎ましく

鬼遣ひおまけの鬼面着けながら

料梢の湖に影置く鳥居かな

小柳千美子

露の臺フェンスの内にほほけをり

まんさくや木漏れ日香る母の里

三椏の花の綿毛に触れてみる

今泉由利

クマムシのよみがえりこし春麗

一座二座三座春日の仏の座

能面の見つむる虚空春の闇

米田文彦

手習ひの墨艶やかや春灯

校庭の風に乗る風廻る風

まんさくや旅の計画二つ三つ

柳田皓一

まんさくのねぢれ戻らぬ黄色かな

境内に巫女だけ目立つ余寒かな

新聞をきれいに読みて春浅し

植村公女

落椿踏みてひと日の憂ひかな

梅組の前へならひや春帽子

鐘つけば銀杏ちるなり建長寺

夏目漱石

一里行けば一里吹くなり稲の風

雲来り雲去る瀑たきの紅葉かな

雛に似た夫婦もあらん初桜

日は永し三十三間堂長し

永き日やあくびうつして分かれ行く

詩を書かん君墨を磨すれ今朝の春

## かさね吟行会

### 「品川宿」 二月

田中清秀

江戸四宿は江戸時代に五街道の日本橋に最も近い宿場町の総称であり、中山道の板橋宿、甲州街道の内藤新宿、日光街道・奥州街道の千住宿、そして東海道の品川宿を指す。今回のかさね吟行会はこの江戸四宿の一つ東海道品川宿で行われた。

平成二十八年二月十二日午

前十一時、京浜急行の北品川駅に集合、早速旧東海街道を川崎方向に進む。品川宿は江戸から出る諸街道の中でも最も重要視された東海道の一番目の宿場であり、家光と沢庵が問答をしたといわれる問答河岸の碑、幕末の志



士たちが密議を交わした大妓楼土蔵相模の跡、屋形船が浮かぶ品川浦の舟だまり、宿本陣跡の聖蹟公園など名所旧跡が多い、其処此処を見物しながらゆつくりと歩を進めて行く。商店街となっている旧街道は江戸時代と同じ道幅で今もひっそりとした宿場町として活きている。宿場を散策しながらの吟行会は初めての企画である。

広重の街道をゆく春の昼

正規

早春の二駅歩く品川宿

京子

あたたかや釣船舫ふ舟だまり

浩一

欄干のほのかに温し舟だまり

清秀

徳川幕府が宿場に指定したのは一千六百一年であるが「品川」は「江戸」より歴史が古く鎌倉時代にはすでに港町として栄え品川湊と呼ばれていた。目黒川を挟んで北品川と南品川に別れ幕末の頃の人口は七千人ほどで大きな宿場町として賑わいを見せていた。古典落語の廓噺の舞台ともなっており他の宿場がそうであったように岡場所としてもおおいに賑わっていたという。

更に旧街道を進むと目黒川沿いの荏原神社には早咲きの桜が満開となっており綺麗な紅色の花びらが観光客を魅了する。この神社は奈良時代の創建といわれ平安時代に源頼義・義家が阿部一族を討つ際この社に詣で戦勝を祈願しており、この故事に由来して神輿を海にくり出す勇壮な祭りが今も行われている。品川宿は歴史が古い為に室町、鎌倉時代創建の神社仏閣が周辺に多いのも特徴である。

梵鐘はまぼろしに聞く春浅し

由利

浅春や幌あげて待つ人力車

文彦

春光の奥に下駄の緒しめる人

素山

江戸からの宿場名残の寒桜

陽子

昼食は老舗のお蕎麦屋と寿司屋とに分かれてしまったが皆それぞれの味に満腹しゆったりした春の昼を楽しみながら、さらに吟行を続ける。

品川寺は「ほんせんじ」と読み区内最古の寺院である、街道に面して江戸六地藏の一番目の地藏菩薩が大きく鎮

座して今も道行く人の安全を見守っている。また、ジュネーブ市との友好のきっかけとなった洋行帰りの鐘や樹齢六百年の大銀杏も有名である。この寺院のすぐ側にある三睦会館が本日の句会場である。この会館は地域の親睦と防災・防犯の活動拠点として使われており、その集会場を使わせてもらった。

何時もの如く囁目三句出し、初めての宿場町吟行も旅人気分が揃い、時折薄日の差す気候の中無事終了となった。

■かさね吟行会■

日時 四月八日(金)

場所 大井町線緑ヶ丘

集合 11時 改札口

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

## 『酔いの徒然』（四八）

丸山酔宵子

### 『大相撲初場所』

両国駅の改札口を出ると艶っぽい鬢付け油の匂いが仄かに感じられ、国技館を囲むように力士の大きな幟（のぼり）が寒風に揺れている。大相撲初場所4日目、正面入り口には入場を待つ相撲ファンでごった返している。

昨今の相撲人気の沸騰で連日の大入り満員、棧敷席など減多にチケットが入手できない中、高田川部屋（元大関安芸乃島）後援会長の好意での久々の相撲見物である。学生時代、アメリカンフットボールキャプテンの大先輩を筆頭に六尺にならんとする大柄熟年4人での棧敷席は、ちょっと狭すぎる。骨太の長い脚を折り曲げ何とか棧敷に座れば、もう十両取り組みは終わりのよいよ土俵入りの始まりである。

満員の場内に入った瞬間、昨日の酒が残っているのか、

照明で照らし出された土俵が浮いているように見え、異次元感覚に囚われるが、暫くすると目も体も慣れてきて、迫力溢れる大相撲の世界に。お茶屋さんの接待も甲斐甲斐しく、名物焼き鳥をはじめ盛りだくさんのおつまみと飲み物。まずはトイレを気にしながらビールで乾杯である。

「ヨイ！ ショーオー！」。艶やかで張りのある体、真っ白な綱と色鮮やかな前まわし、太刀持ちの雄々しさ。更に行事の絢爛豪華で鮮やかな衣装とそのきびきびとした立ち振る舞い。そして上を見れば紫の荘厳な大きな垂れ幕。その中で行われる白鵬の横綱土俵入りは、場内を一体化させ観客を魅了させる。

江戸時代の雷電、谷風から続いている大相撲は、やはり日本人には欠かせない文化であることを思い知らせてくれる。この日本の国技で、一〇年に渡って日本力士が本場所優勝していないが、今場所は琴奨菊が見事に14勝1敗での優勝である。

今場所は茨城県牛久出身の稀勢の里に期待が込めら

れ、二階席には稀勢の里の大応援団。「稀勢の里、稀勢

の里・・・」と団扇で音頭を取って栃の心との一番の大

応援であるが、大柄の稀勢の里があっけなく土俵に転が

され、早くも優勝戦線脱落。しかし、ダークホースであ

る九州柳川出身の新婚大関琴奨菊は、肌艶もよく元氣一

杯。制限時間一杯のイナバウアー(昨今はゴトバウアー

と呼ぶそうである)がより形良く撓(しな)っていた。

今回の相撲見物にはもう一つおまけがあり、大相撲終

了後の高田川部屋での「ちゃんこ鍋」を囲むことである。

高田川部屋は大部屋ではないが、名門二所一門で、両国

に近い清澄の静かな住宅街にある。国技館からタクシー

で降りると、関取をはじめ弟子達がずらりと玄関での出

迎えである。まだ新築間もなく、木の香りが漂う大部屋

のど真ん中にドーンと大鍋が置かれ、部屋中においしい

においを醸し出している。

「さあ、どうぞどうぞ・・・。ビールですか、焼酎です

か・・・。」体はでかいが、まだあどけなさが残る新

弟子風の若者が、無骨の中にも精いっぱいのもてなしで、

迎えてくれるのである。

「ヤーごっつあんでーす。みなさん、元気で、ケガし

ないで、明日も勝ってくださいよ・・・。じゃー、改め

てカンパーイ！」

寒空に幟(のぼり) はためく国技館

酔宵子

## 本からのあれこれ (5) 米田文彦

子どものときから落語が好きだった。落語の本も好きだった。あの頃は晩ごはんを食べ終わった茶の間に流れて来たラジオの「とんち教室」青木先生、石黒敬七、春風亭柳橋、「お父さんはお人好し」の花菱アチャコ、浪花千恵子に大笑いしていた。三遊亭金馬の落語もなぜか分かりやすく好きだった。子どもが笑ってはいけないような場面で我慢できず、噴き出して慌てて我慢したりしたことまで想い出す。

やがて「どうもすいません」「よしこさーん」の林家三平、「痴楽つづり方教室」の柳亭痴楽、「山の穴々、」の三遊亭歌奴、月の家円鏡たちに笑わせて貰いながら、高校大学に進んでいった。

就職して月給を貰い始めた頃、親に落語のチケットをプレゼントしたことがある。

渋谷の東横百貨店の上の方でやっていた東横落語会という当時全盛のホール落語会で、名人上手の噺をみっちり楽しめたものだ。プレゼントは初めてだったから出てくる演者を吟味して買った記憶はあったのだが、いま調

べてみると間違いはない。この噺家たちだった。

柳家さん治 「野ざらし」(現・柳家小三治)

三遊亭小円朝 「つづら泥」

三遊亭円生 「花見の仇討」

桂文楽 「鰻の替間」

柳家小さん 「菟菟問答」

古今亭志ん生 「品川心中」

また林家正蔵、桂三木助、三遊亭金馬、金原亭馬生たちが元気で、若手として、古今亭志ん朝(当時・古今亭朝太)、立川談志(当時・柳家小さん)、三遊亭圓楽(当時・三遊亭全生)たちが出ている。

「がまの油」の柳好も好きだった、「らくだ」の可楽はだいぶ前にいなくなっていた。帰ってきた父の「おもしろかった」という一言を想い出す。

こうして書いてみると、この噺家たちは既にほとんどが亡くなっていて、僅かに柳家小三治のみが人間国宝として頑張っているのみである。

この時代の落語については黄金時代という評価は定着していると思うが、それはそれとして今の落語界もたいしたものだ、昔は昔でいいじゃないか、という世間の風



ではないかと感じてしまう。

中では流石に志ん生のCDが名人として売られているが、他にもいろいろな名人上手が活躍していたことを忘れて欲しくないなど思うのだ。

特に桂文楽だ。最近とみに聞きたいと思う。

完璧に練り上げられた嘶というのが近年はないように感じているからか。

文楽が持ちネタの少なさを言われたときに、(ネタの多さとうまさの評判だった円生を意識して)「私のは全部が十八番です。円生に十八番がありますか?」と言い放ったという話も「船徳」「寝床」「富久」などを聞くと納得してしまう。

「船徳」の 徳さんかい、大丈夫かい

「富久」の ッホイ、ホイ、ホイサ、ホイサをもう一度聞いて貰いたいのだ。

また、立川談志が参議院選挙に立候補したとき、たまに乗った選挙カーが上野黒門町の文楽の家の前に来たとき、談志がマイクで「師匠、お願いします!」と言ったら、二階の窓がガラッと開いて文楽が面と向かって「ようがすよお」と返してきたというエピソードも可笑しい。

いまはご存知、テレビの「笑点」やトーク番組、レポート番組で馴染みも多くなり、中にはドラマの役者として活躍する人も、また嘶の方では寄席の他にもそれぞれ別のきめ細かな場所を設営して落語を楽しませてくれている。私も区民ホールに催しがあれば妻と近所の方と行って笑ってくるのが楽しみだ。

しかし、どれだけ評判の落語家であっても、どうも話題先行、「どうだうまいだろう」が鼻につく。顔に出ている。あまり道を広げず、一心に進む道の幅を狭くして貰いたいと思うのだ。芸は何でもできるというのは勿論結構なのだが、本格TVドラマの主役級として毎週活躍されると、高座上がった姿を見てもドラマの役を想い出し、ギャラはもう高収入だろうな、まで考えてしまうのだ。落語家はなるべく偉くなつてほしくない賢さを見せないで貰いたいと思う。落語以外は余技であつてほしいと思う。

世の中には偉い人賢いように見える人がとても多い、多すぎる、と思いませんか?

(煩雑を避けるため落語家に〃〇代目〃は省略しました。)

## ある自然科学者の手記 (47) 大橋 望彦

### 『七三の人生』

人の生活は一週間を基盤として、この七日間のうち、三日間は透析に費やされることとなると、今迄の生活を続けるのには残りの四日間に圧縮するか、それとも、省くものはきっぱりと省いてしまわうしかない。透析は始めたら途中で止める方法はなく、一生継続なのである。人生の七分の三、即ち一週間(七日)のうち三日は透析に専念してしまふ、と云うこととなる。残りの四日、即ち七分の四が新しい人生となる。少々慌てている状況になった。

朝起きて、透析の送迎車の来るのを留意して待ち、車に乗れば一時間は病院まで掛る。病院に着けば直ちに替えて透析室に入り順番を待つ。針が刺<sup>さ</sup>されてから透析は正確に四時間ベッドにコウソクされる。その間は透析に支障のない範囲で自由であり、個人々々にテレビも用意されていて自由に観ることも出来る。透析が終れば、

遅い昼食をして再び車で一時間掛って帰宅する。既に夕方に近い。方

夕食を作り喰べて一日が終る。

扱て、この透析の四時間であるが、これを有効に使うのには、只テレビを観るのでは有効とは云えず、次に考えたのが読書である。読書はやたらと文学書を読みあさった憶えがあるが、大学を出てからは、学術論文を読むのに追われ読書らしいことはなかった。透析の間は、血圧が下がるのか、直ぐに寝むくなり、仲々先へ進まない。では、これまでに沢山録画した時代劇があるので、ケイタイ用のディスク・プレイヤーを持ち込み時代劇を片端から観出した。しばらくは楽しめたが、これも読書と同じように寝むくなり、先に進まない事が判った。そこで考え付いたのは、夜昼を逆転させてみようという事である。即ち、夜に寝る時間を利用して読書なり、調べ物等をして過し、透析中は、グッスリと寝てしまふという発想である。

これはウマく行くかと思えたが、あんなに寝むかった透析中であるが、寝ようとしても仲々寝られず途中で、

病院長回診で起こされたり、思うようには行かない事が判ってきた。「七・三」の人生はどうやら失敗に了ってしまったが、残りの「七・四の人生」はどの様にしたら良いか。今迄続けてきた「鹿を主題とした木彫」を続ける事。それに、大学生時代に始め、中断していることとして、「グッピー」(熱帯魚の一種)の飼育がある。親友で既に故人となつてしまつた谷宏君が卒業研究でグッピーを飼育していたので、彼から飼育法は伝授されている。大きな水槽は扱いが難かしいのでプラスチックのファイギュアケースの大きめの物を数個購入してそれぞれにエアポンプ、清浄装置、温度調節ヒーター、デジタル温度計を取り付け、水は奥多摩の水道水は上質でカルキ(殺菌剤)も入っていないのでそのまま、使え、準備は完璧となる。青梅市の熱帯魚屋さんから一对の国産純系と稱するジャーマン・イエロー・タキシード系のグッピーを購入し、P(ペアレント・初代)とする。この両親から産まれた仔魚(グッピーは卵胎生の魚で、母親の腹の中でフ化して、仔魚の状態で生まれ、母体から出てくると直ぐに泳ぎ出すF・1)は今回少なく、雄2

匹、雌3匹であつた。この同腹の雄雌兄弟を交配させ次代(F・2)を作る。このシブ・メイトを20回繰り返す事により、遺伝子は極めて類似した均衡系と稱するほど純粋な遺伝子を持つた個体が多量に入手出来る。現に購入してきたグッピーの仔魚は5匹とも非常によく似た形状、色彩をしており、可成り純系といつて良いものであつた。その3代目には一度に47匹も産まれてきたのには驚ろいた、これらの仔魚がどの様に育つのが楽しみである。それでもこのシブ・メイトをしていると、必ずといつて好い位に奇型の仔魚が出てくる。これらは排除する。兎も角、20代の均衡系を得るにはまだまだ時間がかかりそうである。目標はこの均衡系を得る処にある。少しでも違つた個体が現われできた場合、直ぐに隔離して、そのシブ・メイト系を更に作り、遺伝子の異なる均衡系を幾つか作り出すことが出来れば面白くなるであろう。

この様に、時間のかかる夢の様な事柄だけに、「七・四の人生」には良い課題となろう。

## 絹の話し (65)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

## 卑弥呼が錦を買った頃の世界の情勢

## 【卑弥呼は何故魏の国を選んだのか】

弥生時代の中期以後金石併用時代を経て、農業生産経済に移行し、身分制度が生まれ、倭国の百余の部族国家の三十余国をリードしていたのが邪馬台国の卑弥呼でした。紀元57には倭の国から後漢の光武帝に使者を送って、印綬（金印）を受けていますが、女王卑弥呼は227年に魏の明帝に使者を送りました。

なぜこの時使者を送らねばならなかったのか殆どこの書物に書かれていません。

中国大陸では、春秋戦国を勝ち抜いた秦（万里の長城を完成させ、轍の中を統一して交通網の整備、各国様々な漢字の統一）が滅び、前漢、後漢も滅び、その將軍達がそれぞれ勢を得て、魏、呉、蜀の三国時代を迎えています。

卑弥呼は後漢から受けた印綬はその力を失ってしまったので、何処が勝ち抜きか、倭国の将来を賭けた判断に迫られていました。必死の情報収集の結果、近くて交流の深い呉の国を何とか通り抜けて、（呉にしては倭の使者を捕縛する事は簡単であったが、そうすると魏や倭と戦になる可

能性を回避する為）劉備が三顧礼で迎えたと言う名宰相諸葛孔明の蜀の国を南西に見て、遠くの魏の国に使いを出しました。情報によれば、魏の国は西国に近く、バクトリア（現在のアフガニスタン、パキスタン、西南ロシア）方面から通商を求めて来たトルコ系民族が大勢居留していて、物心共に新たなものが流入していました。

卑弥呼は優秀な鉄器とその製造技術、西方の兵士が身につけているアラキサンダー大王由来の戦術、さらに千里を走るという汗血馬等を手に入れるべく魏の国を選んだのだと思われれます。

卑弥呼が出した使いは、魏の明帝より大歓迎の上、金印紫綬を受け、錦3反、白絹百反、鏡百余、鉄の槍等、西域渡りの毛織物、汗血馬（持参不可能であった？）、ガラス器、玉（ギョク！翡翠）やラピスラズリー等の装身具、胡の色々な種（胡瓜、胡麻、胡豆、胡桃）、技術職人等数々の貴重な品を頂き、権威と強い国造りに役立てる事が出来たのです。

243年にも魏王に貢ぎ物を送り、245年には魏斎王より物を賜っています。

倭王にこのように手厚くしてくれたのも魏と倭の間の呉の国を牽制する魏の国の遠交近攻策であったでしょう。結果は的中し、魏は五丈原で戦った豊穰な国、蜀を破ったものつかの間、司馬氏に政権を奪われ、晋が成立（紀元280年）

すると、呉は晋に降伏してしまふですから、卑弥呼の国際戦略は大成したのです。

卑弥呼が絹を頂いた様に、シルクロードに沿って興亡

した多くのオアシス国家の遺構や墳墓から東の中国から運ばれた絹が出土しています。絹は当時としては大切な外交戦略物資であったと思われまふ。

### 【仏教伝来の背景】

7世紀マホメット教が起る以前のバクトリア地方のギリシヤ、ローマ的文化を持ったクシヤン帝国（1世紀～3世紀、カニシカ王二世～三世）でインドから伝わった仏教が興隆し、オアシス国家が覇を競うこの地域は東西の交易の要で、多くの文物が行き交い、東の中国に物を運んだ人達は西方の熱心な仏教徒でしたので、居留した地に寺を建て、僧侶も招聘していました。洛陽の白馬寺などは有名です。ところが此れ等の寺は居留民達の心の拠り所として建てられたもので、布教しようとしたものではありませんでした。後漢の衰退と戦乱（黄巾の乱等）、飢饉、疫病などが重なり、地域によっては住民の8割も餓死するという状況で、子供を交換して食べるなどという事も起こり、もはや道教や拝火教（ゾロアスター教）では救われないと、人身が次第に仏教に傾いて行くのです。

しかし西国では僧侶は国の宝でありましたから、東には

2流以下の僧しか派遣されませんでした。卑弥呼の使者が帰った110年ほど後、長安で仏教を勉強していた法顕は65才でインドに旅立ち、71才の時インドにたどり着き6年間の二年前天才的僧、鳩摩羅什（イン人の父、母は亀茲国王の妹）が万巻の教典、三蔵（経、律、論）を持って長安に入り、本格的な仏教が育つて行くのですが、それでもまだ解らない事があり、唐の時代になつて三蔵法師がインドに行くのです。日本では戒律に詳しい奈良時代の鑑真和尚が法顕の役割、平安時代の空海が鳩摩羅什の役目を果たしたのではないのでしょうか。

### 【教典は何に書かれて東伝したか】

紀元前後、インドや中国では植物繊維の紙が普及していたのでしょうか？中国ではエジプトでパピルスから紙が作られる前から絹の屑を和紙の様に漉いた物を紙として使ってきました。インドの教典にはヤシの葉の等に書いて紐でバラバラめくれる様に綴じた物もあつた様で、乾燥地帯を持ち運ぶには無理があります。オアシス国家の僧達は軽くて乾燥に強い絹紙の巻物に漢訳しながら写経したのではないのでしょうか。

いつの時代も、人も物も激しく動いているものですね！

## 短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人— 五十五回

「月虹」 鮫島 満

### 二十五 磯幾造 2

寝る前の老の楽しみ『つきかげ』の斎藤先生の境涯  
したし

靴履けば躓く老の嘆きをも沁みてわがもの『つきか  
げ』読めば

老の歩を嘆きたまひし地下足袋の斎藤先生のみ姿思  
ほゆ

ありありと枕辺にたつ面影のあれど夢なれば言交す  
なし

「茫々としたるころ」と詠まましし斎藤先生を老  
いて哀しむ

斎藤茂吉の死後、佐藤佐太郎、柴生田稔とともに作者の師山口茂吉が編集した『つきかげ』を読んだ感慨を詠んだものである。この第十七歌集については余分な一冊だったという批評があるが、茂吉につき従いその生涯を知る人にとっては忘れることのできない一冊なのである。

一首目に「斎藤先生の境涯したし」とあるのは「アララギ」の人たちに「茂吉のよき秘書」と言われるほどであった山口茂吉の門下である作者にして言えることである。歌集を読めば実際に会った茂吉の姿が思い浮かぶのであろう。

二首目の「靴履けば躓く老の嘆き」は茂吉の「この体古くなりしばかりに靴穿きゆけばつまづくものを」（昭和二十三年作）を踏まえている。三首目もそのことにかかわる。茂吉は靴よりも地下足袋を好んだのであり、事情によつては靴を履かざるをえないこともあったのであろう。

四首目の「ありありと枕辺にたつ面影」を歌う時の作者の脳裡には、「代田なる斎藤先生ともに訪ひ受けしみ情け忘れざらめや」「孫弟子のわれ励ましくれし斎藤先生そのみ言葉も今に忘れず」（『夕丘』平成二十年）というような自らの歌が浮かんでもいるだろう。

五首目の「茫々としたるころ」は「茫々としたるころの中にあてゆくへも知らぬ遠のこがらし」（昭和二十五年作）を指している。『つきかげ』には当然のこととして自らの老いを嘆く歌が多いのであるが、作者の心に沁みた歌には、「朦朧としたる意識を辛うじてたもちながらにわれ暁に臥す」（昭和二十五年作）や「いつしかも日がしづみゆきうつせみのわれもおのづからきはまるらしも」（昭和二十七年作）などがあつたであろう。

「除外例なき死」と詠まましし斎藤先生そのみ心を  
老いて思ほゆ  
同

初・二句の「除外例なき死」は、「暁の薄明に死をおもふことあり除外例なき死といへるもの」（昭和十五年作）を指している。

## 二十六 窪田章一郎

はじめてを会ひ申すなり茂吉大人の差出だす手をわ  
が手に握る  
『六月の海』昭和二十五年  
握手をと手を伸べたまふ茂吉大人清く明るき翁の面  
して  
ゆくりなき路上の会ひに茂吉大人の伸べたまふ手を  
とりてわれ立つ  
にこやかにさし伸ぶる手は翁さび冷たき御手をして  
いましけり

題詞に「上野博物館にて 四月某日、父とつれだち、上野博物館へ行き、佐藤佐太郎氏を伴ふ斎藤茂吉氏と偶然会ふ」とある。

歌は四首とも偶然に会った茂吉と握手をしたことだけ

を詠んでいて、父の空穂のことや佐藤佐太郎のことなどには一切触れていない。握手は茂吉の方から求めたこと、茂吉の顔が「清く明るき」ものであったこと、茂吉の手が冷たかったことが内容となっている。

この日のものと思われる茂吉の歌には、「池の端の蓮玉庵に吾も入りつ上野公園に行く道すがら」（『つきかげ』）がある。茂吉の日記には、「佐藤佐太郎上野公園、池ノ端蓮玉庵、イタリアノ美術展覧会、（中略）窪田空穂浅草マデ行キ地下鉄渋谷佐藤、父ノコトヲ語ル」とあり、章一郎の名は書いていない。空穂が浅草まで一緒に行ったように読めるが、ここは、「窪田空穂と会った。佐藤佐太郎と浅草まで行き、地下鉄で渋谷に帰った。車中で佐太郎が父のことを語った」ということであろう。

『ちまたの響』読みぬと御文あり読みたまひけむこ  
とを喜ぶ  
ふかき目をもちてゐたまふ道のうへの老先進の後行  
かむかな  
同

小題に「又、その後」とある。茂吉は他人との対応を重んじたというから、上野での初対面の慌ただしさを手紙で補ったのであろう。『ちまたの響』（昭和二十五年刊）は章一郎の第二歌集である。

# 楽しい時間 41

山本紀久雄

2016年2月29日

## パリの審判(5)

筆者は1月22日(金)20時放映のNHK「妄想ニホン料理・ブラジル・セルビア土手鍋編」でブラジルとクロアチアのカキについて説いた。

この番組は日本料理を知らない外国人に、料理名だけを伝えて作ってもらうという面白番組であるが、1月22日は「土手鍋」をブラジルとセルビア人に挑戦してもらったもの。

作られた料理の説明は省くが、「土手鍋」はカキがメインであるから、日本の視聴者にブラジルとセルビアの隣国クロアチアのカキについて解説しろ、と言う依頼が筆者に届き、恵比寿のオイスターバーのカウンターに座らせられ、約2時間、取材を受けた次第。どうして筆者にカキの解説依頼が来たのか。それは今までに世界のカキについて著書が3冊あり、それをNHKが見つけたのである。



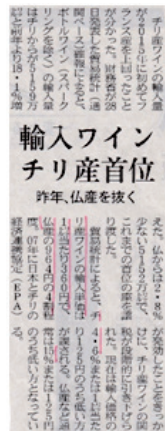
さて、カウンターの大皿に盛られた生カキを食べるの事になり、白ワインを欲しいというと、数本の白ワインが目の前に並んだ。しかし、いずれもいま一つで、シャブリは無いですかと尋ねると「ありません」と奥の方から、まだ封が切られていないシャブリが出て来た。

どうもシャブリは高いので、NHKの手前、店側が遠慮していたらしいが、どうせ我々が払っている受信料のNHKだから、この際、高いシャブリをいただいたわけ。

それと、生カキにはシャブリというのが世界の常識である。M・F・K・フィッツシャーの名著「オイスターブック」でも「冬の生牡蠣にあわせるワインとしてもつとも無難なのはシャブリだろう。それとシャブリは輸送しても味が落ちにくい」とある。「輸送云々」という表現は眉唾と思うが、いろいろ生カキを試してみても、確かにシャブリが一番合うと感じる。

ところで、日本のワイン輸入が2015年フランスを抜いてチリがトップになった。セブンイレブンのワイン販売ケースに行くところ、一番良いところにチリのコンチャ・イ・トロ社「サンライズ SUNRISE」がおいてある。日本最強コンビニでチリ・ワインがメインとなっている姿を見ると、フランスも落ちたものだと、一瞬、考えやすい。

しかし、「チリがトップになった」という記事をよく読むと、





背景に日本とチリのEPA経済連携協定締結があり、結果として関税が引き下げられたことが最大要因と分かる。

チリのコンチャ・イ・トロ社に訪問したことがあり、実際のワイン畑を視察してみても、確かによく整備され、立派なワインづくりをしていると確認したが、ひとつ、フランスのボルドーと違うところがある。それは「テロワール」というワイン哲学が深く背景にあるかどうかである。

例えば、ボルトーのワイナリーに行くと、次のような看板を見つかるだろう。そこには「Notre Terroir」「Our Soil」と掲示し書かれているとおり、自らのワイン畑について自負心を強烈に持つている。

「ワインは、フランスの歴史であり、主体であり、文明である」とフランス政府が述べる背景には、威容を辺りに払うがごとき「我らのテロワール Notre Terroir」という宣言掲示が昔から現在まで脈々とつながっていることであり、これがフランスの最大の強みではないだろうか。

「テロワール」とは、「自然環境要因に由来するワインの個性」のことと、

『ワインの個性』（堀賢著）が述べているが、このテロワール概念の説明は難しい。

理屈で理解しようとしても、なかなか納得できないだろう。



確かに「パリスの審判」の結果、フランス・ワインはカリフォルニアに負けたが、ワイン格式ではまだまだ十分な優位性を持ち続けている。何故なら、フランスの「テロワール」は伝統と歴史に彩られているので、そのエッセンスを学ぼうとしてもなかなか出来ないからである。加えて、フランスが持つワイン業界の内部構造がある。昔からヨーロッパ市場での競争相手であるイタリアやスペインは、技術的、財政的、人材的にもフランスのワイン業界に太刀打ちできないし、新世界の生産者も、フランスの体質的な強さの前には影が薄い。同様に、日本ワインの品質が向上し、世界でも勝負できるようになったと言う人もいる。だが、果してどうか。

甲州ワインは国内でブーム、世界のワインコンクールでも金賞受賞というニュースが流れる。確かに、ワインづくりは進んでおり、認められつつあるようだが、

ワイン業界の識者が「甲州ワインと同価格帯の世界のワインとは勝負できない。ロワールのミユスカデヤソーヴィニヨン・ブランに近い酒質で、格式にも欠ける」と発言する。ワインの世界は深い。



# 楽しくマナー ⑩

辻 照子

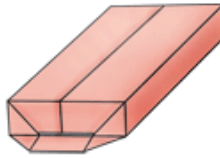
## 「ラッピング」

チョコレートに色とりどりのラッピングをして飾り並べられているバレンタインデー。手作りのチョコレートやお気に入りのワインを好みのペーパーで包んでプレゼントするのが流行っているこの頃、ラッピング講座で、より素敵でおしゃれな包み方を習う人が増えています。ラッピングはキャラメル包み、斜め包み、スクエア包み等が基本で、ラッピングにもマナーがあります。

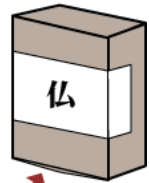
キャラメル包みは箱の中心で左、右の順に紙を合わせ右が上になるように包むのが通常（祝儀）ですが、不祝儀の時は左が上になるように包みます。

ペーパーにあらかじめ何本かターツを折つてからキャラメル包みをし、リボンを斜めやクロスにかけ、スターボー（星形にアレンジしたリボン）やシールをはると華やかになります。中央で合わせず端で合わせたり、色々なバリエーションで包む事ができるキャラメル包みは慶弔のマナーを心得てアレンジをすると幅が広がります。欧米ではシンプルなどの包み方が主流です。

斜め包みでは、通常（祝儀）折り返しの下が、上から折り返した部分の上に来るようにして「福が逃げないように、下から受け止める」留め、不祝儀の包み方は、折り返しの上の方が、



キャラメル包み  
(祝儀：右が上 不祝儀：左が上)



斜め包み (矢印の方が開放)



折り返した部分の上に来るようにして「不幸な事は悲しみを上から下へ流す」留めます。

祝儀袋・不祝儀袋は紙幣を入れた後に上下をどのように折るか迷ってしまう事があります。

祝儀袋は図と逆に下方が

裏の折り返しは上方⑦が①の上にくるようにならねます。



不祝儀袋は図のように上方が上へと折る。

上で、福が入ってくるようにと折ります。お祝い時のミスは笑って許して貰えそうですが、婚礼や出産祝いで弔事の包みをしないよう注意が必要です。悲しい時のミスは「突然のことで慌てたのでしょうか」と見過ごして頂けそうですが、更に悲しい気持ちにさせてしまいたいもので細かい心配りをしたいものです。袱紗や風呂敷でも左右の合せや上下の折り方は慶弔によって包み方の違いがあり、ラッピングのマナーと共通します。



上包みタイプ

特別に選んだペーパーやリボンで、プレゼントを渡す相手を思い

ながら包むと、より気持ち通じます。店でラッピングをしてくれることが有りますが、ちよつと過剰な包装に出会う事もあります。例えばフランスパンを買つたと細長い紙袋に入れビニール袋も添え、更に手提げ紙袋に入れて「丁寧すぎる」と思つています。パリではフランスパン (Baguette) を買うとそのまま手渡されます(焼き立てのパンを小脇に抱え、ちぎつてはおぼるパンの美味しかったこと)。剥き出しのまま塀の上に置いたり、買い物かごや自転車のかごに何にも包まず入れてあるフランスパンや、トマトを袋から出しナイフでそのまま手の上で切り、サラダに添えたり、思わず「洗わないのですか?」と。すると料理の先生で南仏出身のマグムが「私はフランス人 (Je suis française)」と返答、そんな時「なんて不潔な人たち」と思つたけど、夏でもコートやジャケットを着る肌寒い日もある、涼しく乾燥しているこの国は、梅雨があり湿気の多い日本のようにジメジメ感がないのでばい菌も繁殖しないのかしらと思つたら平気になり、フランスで生活をして二年も経たないのに同じことをしてる自分がいました。マルシェ(市場)やスーパーでフルーツやシヤンパン(シャンム)を店頭に並べてあるものをそのまま「味見して (Goûter)」(これを美味いよ (C'est bon))と差し出してきたのには驚きました。

ワインはフランスの白と赤、スパークリングワインのドンジュセツペ、ビアンコ。このスパークリングは甘口なのでチーズケーキと緒に試飲しました。

**\*たっぷり白菜の蒸し煮**

材料 (4人分)

白菜1/3個 ツナ缶1缶 砂糖大1 醤油大1.5 ごま油

大きじ1.5  
作り方

①白菜はざく切りにし、鍋に芯の部分を入れ蓋をして10分位煮、残りの葉も入れ更に10分煮てツナを加え混ぜ、砂糖と醤油、ごま油で調味する。

**\*カキのベーコン巻**

材料 (4人分)

かき12粒 小麦粉大きじ2 ベーコン(薄切り) 6枚 サラダ油大きじ2 レモン4切れ グリーン葉4枚 A(白ワイン大きじ2 こしょう少々)

作り方

①カキは塩水で洗い、真水で水を変えて洗いザルにあげ、Aを振つてしばらく置き、水気をふき小麦粉をまぶす。

②半分に切つたベーコンで①を巻きようじで止め、フライパンに油を熱し転がしながら焼き、ようじをとり皿に盛りグリーンを添える。

**\*簡単チーズケーキ**

材料 (丸18cm型分)

クリームチーズ200g 牛乳100cc 砂糖大きじ7 卵2個  
レモン汁大きじ2 薄力粉大きじ4 ベーキングパウダー小さじ1

作り方

①材料全部をミキサーに入れ30秒程混ぜ、型に流し込み180℃のオーブンで40分位焼く。(クリームチーズは室温に戻しておく。)

## 「歴代天皇御製歌」(五十四)

貫名海屋資料館

「伏見天皇」第九十二代・在位・一二八七年(二十三歳)・一二九八年(三十四歳)

伏見天皇は、後深草天皇の第二皇子。天皇親政をなされ、讓位後は院政を、政治に、和歌に強い関心を示された。京極為兼は歌を詠むとは、心の絶対的な尊重と、言葉の完全な自由化を主張し：この考えは、伏見天皇と側近に受け入れられ、京極派の和歌が始まった。

伏見天皇、上皇の院宣に、京極為兼の撰進による勅撰和歌集は、玉葉和歌集と名づけられ、伏見上皇、伏見上皇の皇后永福門院、藤原定家、藤原俊成、西行、和泉式部、慈円、紀貫之、柿本人麿、西園寺実兼：二千八百首の歌が収められた。

### 春の御歌

咲きそむる一木の花とみるほどによもの櫻もさかりにぞなる

この雨にふりめぐまれてまたれつる梢の花のあすやひらけん

初秋夜

たなばたのあふ夜ちかしと天の河そらに涼しき風わたるなり

花

咲きやすると待ちつゝあれば櫻花けさふる雨にほころびにけり  
惜しむべく悲しぶべきは世の中に過ぎて又こぬ月日なりけり  
天つ空てる日の下にありながら曇る心の隈くまをもためや

風雅集

寄国祝

代々たえずつぎて久しくさかえなん豊蘆原の国やすくして

御返し

玉章たまづさのその玉の緒のたえしより今は形見のねにぞなかるゝ

童謡 『光るお蚕さん』

高橋育郎作詩  
高橋知子作曲

お蚕さんは 宝物

お蚕さんは かわいいな

お蚕さんの 贈り物

桑の葉シヤリシヤリ 食べている

お肌が光つて きれいだな

光るハンカチ うれしいな

裏の畑は 桑畑

口からキラキラ 光る糸

汗を拭いたら さわやかに

たくさん たくさん お食べなさい

体を包んで 繭になる

お肌が潤う ふしぎだな

元気に大きく おなりなさい

人にやさしい 糸になる

幸せの糸 絹の糸

## 「氷魚」のことから (183) 岡本八千代

今年(一九一六年)は夏目漱石没後百年に当たる。今朝の読売新聞(二〇一六年二月二十三日)の編集手帳のコラムにこんなことが書いてあった。

「作家の内田百閒(ひゃくかん)は師と仰ぐ夏目漱石の鼻毛を十本愛蔵していた。もらい受けた書き潰(つぶ)しの原稿に付着(つ)けていたという。『吾輩(わがはい)は猫である』には苦沙弥(くしゃみ)先生が鼻毛を抜き原稿用紙に植え付ける場面がある。漱石その人の習癖(じやくへく)だったらしい。百閒(ひゃくかん)いわく、(世に遺髪(いさげ)と云う事もあるので、私はこの毛をおろそかには考(かん)へない」と。(「私の漱石と龍之介」筑摩書房より)なるほど、お弟子さんたる者の師への節操(せうさう)を感じさせられた一文(いちぶん)であった。

今、また「坊っちゃん」とか、「吾輩(わがはい)は猫である」が騒(さわ)がれている。私は、女学校時代に漱石の本に凝(こ)ったことがある。その時は、漱石を神様(かみさま)かのように思ったほどだった。それなのに、今は正岡(ただのり)子規(こき)のこと(こと)を調べて書(か)こうとするようになってから、急に近(ちか)さを感じるようになって、なんとなく心(こ)楽(らく)しい。

また、今年の二月三十一日の読売新聞にも、漱石のことを「『真面目(まじめ)にふざける』魅力(まじり)」とも書(か)かれていた。受けとめ方は、それぞれ(それぞれ)の個性(こせい)によつて違(ちが)うとは思(おも)うが、私は「ふざける」ということ(こと)とはとらわれた。そして、子規(こき)のユーモア(うもあ)と同じ(おな)ようなもの(もの)を感じ(かん)じたのであつた。

子規(こき)と漱石(そうせき)との出(で)会(あ)い。子規(こき)と漱石(そうせき)は、ともに慶応(けいおう)三年(にんぱくしち) (二八六七) 生(う)まれの同(おな)い年(ねん)である。漱石(そうせき)は二月九日(にがつにんか)の生(う)まれ、子規(こき)は九月十七日(くわがつじゅうしち)の生(う)まれであつた。この二人(ふたり)が親(おや)しく交(まじ)りあはれたのは、明治(めいし)二十二年(にんぱくじゅうに) (二八八九) 一月(いちがつ)のこと、二人(ふたり)とも数(かず)え年(ねん)でいうならば二十三歳(じゅうさんさい)であつた。

漱石(そうせき)は、紀行(きぎやう)文(ぶん)「木屑(ぼくせつ)録(ろく)」を明治(めいし)二十二年(にんぱくじゅうに)九月(くわがつ)に脱稿(だつこう)した。その時(とき)、同書(どうしょ)の末尾(まへび)に子規(こき)の批評(ひひやう)文(ぶん)が付(つ)されてた。それは、

余(あ)知(し)吾兄(わがせいの)久矣(くわい)而(し)吾兄(わがせいの)交(まじ)り者(もの)則(すなは)ち始(はじ)り于(よ)今年(ことし)一月(いちがつ)也(なり) (余(あ)、吾兄(わがせいの)を 知(し)る こと 久(く)し。而(し)て 吾(わ)と 交(まじ)れる は、則(すなは)ち 今(ことし)年(ねん)一(いち)月(がつ)に 始(はじ)り

と書(か)かれていた。また、この批評(ひひやう)文(ぶん)の末尾(まへび)には「明治(めいし)二十二年(にんぱくじゅうに)十月十三日(じゅうがつじゅうさん)夜(よ)、於(お)東(とう)台(たい)山(さん)下(げ)橋(はし)居(る) 獺(た)祭(さい)漁(ぎょ)夫(ふ)常(じょう)規(ぎ)謹(きん)識(し)」と書(か)れていた。

子規(こき)の随筆(ずいひつ)集(しゆ)の「筆(ふで)まかせ」の中に「交際(かうさい)」と題(だい)する一文(いちぶん)がある。これは少(すこ)し前(まへ)述(じゆ)した。

「余(あ)は、交(まじ)りを好(この)む者(もの)なり、また交(まじ)りを嫌(きら)む者(もの)也(なり)。何(なに)故(ゆ)に好(この)むや。良(よ)友(とも)を得(え)て心(こ)事(じ)を談(だん)じ艱(がい)難(なん)相(あ)助(すけ)けん(と)欲(ほ)すれば也(なり)。何(なに)故(ゆ)に嫌(きら)むや。悪(あく)友(とも)を退(ひ)け光(ひかり)陰(かげ)を良(よ)費(ひ)せず、誘(よ)導(どう)をのがれんと欲(ほ)すればなり。余(あ)は偏(へん)屈(くつ)なり。頑(がん)固(こ)なり。すきな人(ひと)、無(む)暗(あん)にすきにて、嫌(きら)ひな人(ひと)、無(む)暗(あん)にきらひなり。而(し)て、其(その)朋(とも)友(とも)を選(えら)ぶにも先(ま)づ人(ひと)物(もの)を見(み)る。次(つぎ)に学(がく)識(し)を見(み)る也(なり)。正(ただ)直(ちか)にして学(がく)識(し)のある人(ひと)を第(だい)一(いち)等(とう)の友(とも)とす。」と。かくして漱石(そうせき)を「畏(おそ)友(とも)」として子規(こき)はだんだんと深(こ)く親(おや)しくなつていったのであつた。

## 長塚節と草鞋

夏目勝弘

節の旅の特長は人のあまり行かない所にも足を運ぶことが多い。明治二十九年十八歳のとき中学四年に進級まもなく神経衰弱になり不眠症のため退学、塩原まで長途の徒歩旅行に出る。

子規も帝大を中退、不眠にかかり、そして芭蕉の跡を辿り東北方面への旅に出る。草鞋脚絆でなく、袴に駒下駄だった。節に影響を与えなかつたとは思われない。(芭蕉の句に)

○あやめ草足に、結ん草鞋の緒(おくの細道)「土」の卯平の草鞋を作る、行に、

(彼は原料の藁を勘次に要求せずに五錢十錢と懐錢を出して能く選つた藁を買つて背負つて来た。

その二把の藁で繩が二房半位い・草鞋ならば五足ぐらい作れる。

一足の草鞋が一錢五里が相場、一日藁仕事をすれば六七錢になる。)

草鞋を作る様子も書かれている。(四筋の堅繩に軟らかな藁をくねくねと透してはその繩の間に指を入れてぎつと前に引き緊める。)

自分もいま草鞋を作っている。というよりも作らされている。祭礼に必要な草鞋が手に入りにくく、一ヶ月前には予約しないと、そして足千二百円にもなつてしまつた。

そこで自分の所で作れということになり一月より作り始めている。卯平は軟らかな藁をうねくねと作っているが、今の藁は品種改良により藁が硬くなり苦勞をしながら一日足のペースで作っている。草鞋を作りながら節の旅に思いをめぐらせながら一日藁くずまみれになり草鞋を作る。

節の写生文のなから、草鞋に関するところを書き出してみる。

「月見の夕」のなかに(少くなくとも三四人六七人の連中が男女混合でよたよたとやつてくる。大抵は若い同志でいづれも草鞋(しらへである)と月見に行くのも草鞋をはく。

「才丸行き」には駒を曳く博勞が前草鞋一足ぶらさげて居る)一足の草鞋でどのくらい歩けるのだろうか。

節は峠の麓の古ぼけた家で婆さんより一足の草鞋を一錢五厘で買ひ、夜の峠を越えてゆくが、山道からころげ落ち這いのほり、どうにか九時に宿に着く。

宿ではまあちゃんという若い女が草鞋をといてくれた。草鞋の底が抜けていた。

朝歩くと足うらが痛い、見ると栗の棘が夥しく立つている。針を借り掘る右足はまあちゃんがとつてくれた。

節は泊つたおり、どこの宿でも若い女性の名前で書いてある。これは長塚家が母親まで三代美人が輩出されていたためなのか。

「佐渡が島」の小木の宿に着き茶を出してくれた女が驚くほどの美人であつた。美人という以外に比の女を形容の仕様がな、と。

節は此の美人の名前は「佐渡が島」では書くことがなかつた。世間の男どもに知られたくないと思つたのだろうか。

(雨掛の荷物を提げ梯子段をおりて行くと女は洗濯して乾かした脚絆と底の抜けた足袋が置いてあり、足袋にはまだ温もりがあつた。

女は土間へおりて新しい草鞋の紐を通して小さな木槌で草鞋を叩いてくれた。草鞋の代はと聞くと、一足進上すること。

この草鞋の底が抜けて足が痛くなるまでは決して紐を解かないと節は強く思つた。

此の草鞋の紐はどうしてもぎつしりと結んでおかねばならぬ、寺泊の砂浜で草鞋の紐を結びなおした。



## ことのはスケッチ (448) 今泉 由利

三河湾の海辺。百メートルに少し欠けるけれど大恩寺山もあり。音羽川の土手には、持統天皇がここに来られた大きな石碑がある。

朝早く、蓮の花が開くのを見にゆく池。蒲の穂が直ぐ立つ沼。夕刻、からすりの幽玄白い花を見にゆく生け垣。

小学校への通学路は、桑畑。野菜畑。麦畑、田んぼ。花畑。畦道の四季折々の草々花々。

祖父の開業医を父が継ぎ、祖父は裏庭にみかん山をつくり、その向こうを畑にした。季節季節の野菜、花々を育てていらした。私は、祖父の後をついてまわり、麦まきをした。麦踏をした。さつまいもの葉っぱを押し、じゃがいもを半分切りし、灰を付けて植え付けた。へちま棚も、藤棚も、それぞれの花が咲き実つてゆくのだだった。

かぼちゃの花が咲き、毎日毎日大きさを増した。

学校へゆく途中の大きな屋根の、その上に小さな屋根があり、蚕を養う家だと知る。どうしても行ってみたく、母に頼んで、一緒に訪ねたことがあった。

大きな屋根の家の二階に、竹で出来た大きな筥(?)が何段にも、蚕棚になっていた。蚕が桑の葉を食べていた。

紙箱に「横白色」の小さいつぶつぶの卵をいただいて帰った。自分の机の一番大きな引き出しで飼うことにした。黒くて長い毛の生えた幼虫がいつぱいになった。せつせと桑の葉をいただきますにゆ

き：脱皮して白くなる。脱皮をくり返し、動かなくなった。白い糸を口から出し、繭をつくりはじめる。まっ白い繭になり、美しい光沢、本当にうれしかった。繭を喰い破り、カイコがでてきた。びっくり仰天。引き出しを庭に出し、飛んでゆきなさい！キヤッ畑から蝶の蛹を沢山集めて、やはり引き出しに入れ飼っているつもりになっていたことがあった。引き出しは半開きにしておいた。学校から帰ると部屋中を紋白蝶が飛んでいた。蒲の穂も好きだ。なんといっても、大国主命の、白兔の大怪我を直されたこと。

外国に住むようになり、行く先々の国々でも蒲の穂に出あえることがあった。

幼かった日が蘇り、「こんなことをしているよ」と、父母と話をしているような気がして、天涯孤独より救われた。蒲の穂は、私の心の傷を直してくれる。そんな薬効があった。

今、白金台、国立科学博物館附属、自然教育園の水生植物園へ、蒲の穂に会いにゆく。その時々を、一年を通じて見守っている。今の季節、蒲の穂は白く蓬け、爆ぜたよう。細い綿毛の一本一本に小さな種をつけて、春になった風につて、どこへゆくのだろう。蒲の穂の、一番上の方に雄花が咲き、その花粉に薬効があるのだという。

蒲の穂を敷き、その上を転がり花粉をつけ、そして皮膚はもとの白兔。穂綿には薬効は無いそうだが、ふわふわと気持ち良く、布団にするのが良いそうだ。

今も、目の色を変えて、木々草々と遊んでいる。

## 編集室だより【二〇一六年二月】

三河アララギ賞 平松温子様

「和菓子街道」ご自身の足で歩かれ、ご自身で味わい、街道の歴史と共に、和菓子を紹介いただいた素晴らしい随筆。十年間連載して下さいました。三河アララギの誇りでした。これからも宝と持ち続けます。ありがとうございます。

○「おはよう」を言うでなく「おやすみ」を言わず「原稿を書く」「編集をする」「調べものをする」・・・とにかくおとなしくしている毎日。

真つ直ぐ歩くつもりが、右に寄っていつてしまった日があり、家より徒歩十五分くらいのジムに通うことを思いたち、せつと速足で通う。

先日、筋肉測定で、「五十才前半の筋力」との結果がついてきた。いよいよ「四十才代」をめざす。

○中国の歴史トリズムとをもった漢字と、日本に伝って日本で過した漢字と、これは外国語と日本語の違いがある。と漢詩クラスで思っていた。

○雪は、なぜあんなに白いのだろうか、どうして雪の結晶が一つとして同じにはならないのだろうか…雪降り。

水分子の水素結合の配置によって、一つとして同じにならない六角形になるのだと。宇宙的、科学的なことは、はかりしれないがおもしろい。

人工降雪機で作られる雪は、ほぼ球形になるのだそうだ。

○国会図書館より、三河アララギ・新年号が未着、との知らせがあった。

三河アララギの発刊以来、納本させていたいただいており、感謝いたします。今回未納となった不備を申し訳けありませんでした。すぐ納本させていただきます。

○旧東海道品川宿周辺吟行。

京浜急行、北品川宿入口集合。すっかり松を無くした品川宿辺りには、藤沢宿の松、坂下宿の松、土山宿の松、御油宿の松、浜松宿の松、三島宿の松、袋井宿の松、亀山宿の松、関宿の松、保土ヶ谷宿の松…が移植されていた。東海道五十三次を偲んではみるものの、ほとんど何の面影も残らない品川宿を哀しむ。

○王子稲荷神社・二の午。

平安時代以前から「東国三十三国稲荷総司」の称号。歌川広重「名所江戸百景」には、王子稲荷境内から、筑波山が見渡せる図。

徳川將軍家代々の祈願所と定められてきた。お参りのたいへんな人混みにわけ入った。

豊川稲荷のお座敷で、父母と「精進料理」をいただいた日を思い起す。

## 和菓子街道 (114)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

### 姫街道(10)

細江町の市街地から先、姫街道を三ヶ日方面に進んだ街道沿いにある手作りみそまんの店「かじや」。こちらは、創業50余年の比較的新しい店だが、ガイドブックなどでも紹介されておりファンも多い。

みそまん専門店とあって、かじやのみそまんは全て手作りで、形も少しずつ微妙に違うのがまた良い。新しい店とはいえ、きっと昔、各家で作っていたような時代には、こんな感じのみそまんだったのではないかと思わせる懐かしさがある。

しっとりとした生地ながら、軽い食べ応えで、黒糖の香りが際立っている。漉し餡はきめ細かく、さらっとしており、生地によく合っている。大きさは他店に比べて若干小ぶりで、食べやすいサイズ。なだらかな曲線で、ふわっと丸い形に仕上がっている。



利休饅頭に近い印象で、これなら茶席の主菓子として使えそう。そう思って、気賀から東京に戻る際、翌日の茶の稽古用に買い求めた。

小ぶりで優しい味わいのかじやのみそまんは、旅の良い土産になった。

#### ◆かじや菓子店

住所：静岡県浜松市北区細江町気賀1081

電話：053-522-0186

## お知らせ

△五月号の原稿は、三月三十一日（木）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yur188@cronos.ocn.ne.jp

Homepage <http://maizumi.yuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美